

近年の発掘調査成果をもとに寒川町大（応）神塚古墳を読み解く

寒川町教育委員会生涯学習課生涯学習担当 小林 秀満

大神塚・応神塚（おおじんづか）両表記が見られるため「大（応）神塚」と表記

ウィキペディア フリー百科事典 より抜粋

大神塚古墳

概要

神奈川県中部、[相模川](#)東岸の台地先端部に築造された古墳である。現在は[安楽寺](#)の裏手に所在し、周辺にはかつて小型古墳5基が分布した（大神塚周辺古墳群、現存1基）。現在までに前方部は大きく削平を受けているほか、[1908年（明治41年）](#)に埋葬施設の発掘調査が、近年に墳丘の発掘調査が実施されている。略

築造時期は、[古墳時代](#)前期の[4世紀](#)後半頃と推定される（近年の調査以前は5世紀前半頃の築造と推定）。一帯では大神塚周辺古墳群の盟主墳に位置づけられる。被葬者は明らかでないが、地元では初代[相武国造](#)の茅武彦命（かやたけひこのみこと）と伝承される。（以下略）

寒川神社との関係

略 寒川地域では、寒川神社は[国造](#)の祖先を祀る神社としても伝わっており、大神塚は[相模川](#)流域を初めて開拓した初代[相武国造](#)の茅武彦命を、後世に後裔が追慕するために築造したとされていた。（以下略）

安楽寺は「寒川大明神者」（寒川神社）の[別当寺](#)として創建され、古代に扣卒（控えの兵士）が築いた塚に、神躰依（寒川大明神の御神体）が宿り、此院（安楽寺）が建てた石碑がある大神塚が聖跡であるとする。（以下略）

寒川神社の靈魂（神靈）が祀られるとの伝承が残っていた。また、[1931年（昭和6年）](#)に制作された『寒川音頭』の第14番の歌詞には「国造 應神塚に 置いた薄霜 ほのりと消えりや」とあり、当時の人々が大神塚を国造の墓陵として認識していたことが窺える。

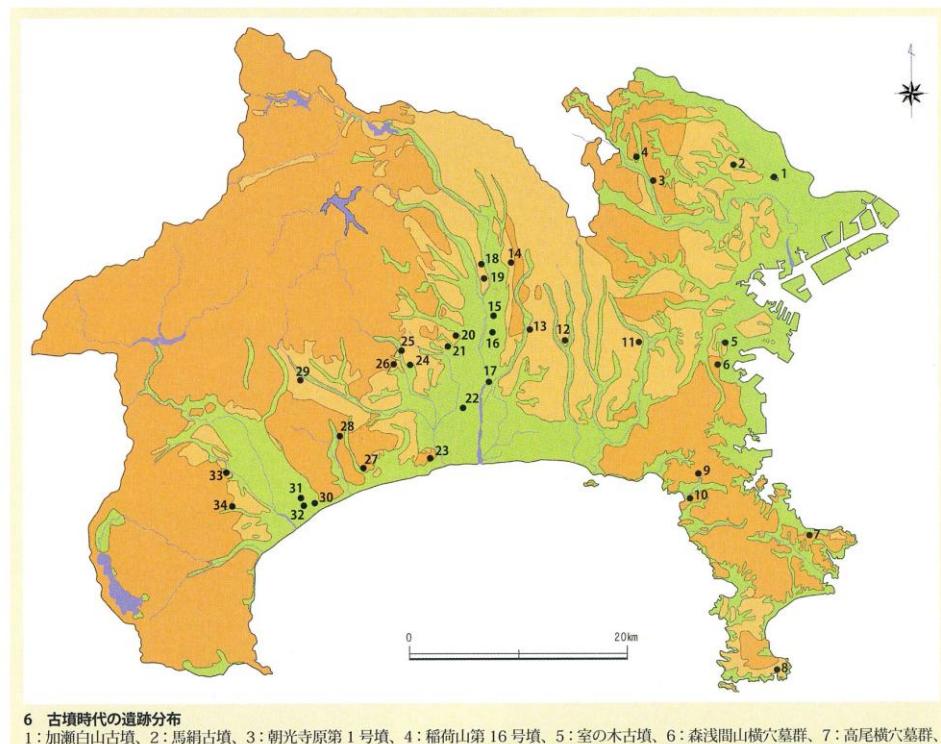
1 古墳時代の概要

- ・考古学上の時期区分で、古墳が盛んに作られた時代
- ・3世紀後半から7世紀末まで
- ・倭国のヤマト王権が拡大し、王権が強化統一されていった時代と考えられている。
- ・神奈川県においては4期に区分されている。

前期 3世紀後半から4世紀

中期 5世紀

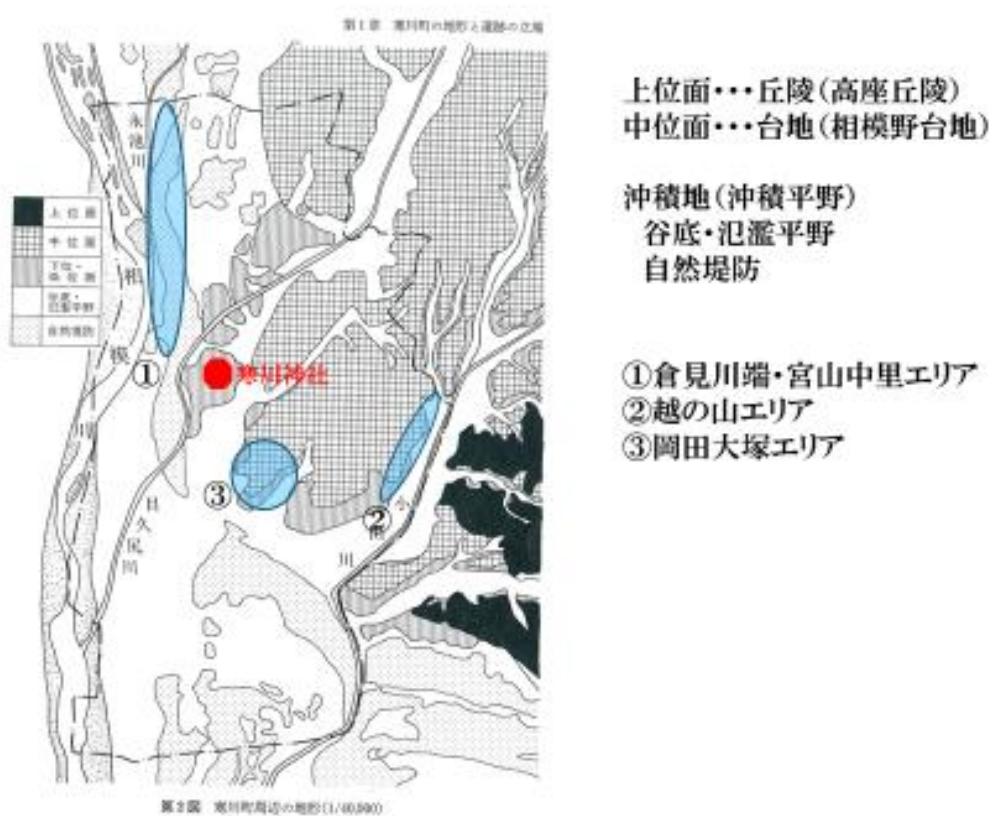
後期から終末期 6世紀から7世紀



6 古墳時代の遺跡分布

1: 加瀬白山古墳、2: 馬絹古墳、3: 朝光寺原第1号墳、4: 稲荷山第16号墳、5: 室の木古墳、6: 森浅間山横穴墓群、7: 高尾横穴墓群、8: 松輪横穴墓群、9: 池子遺跡群、10: 長柄桜山古墳群、11: 上矢部富士山古墳、12: 代官山横穴墓群、13: 吉岡遺跡群、14: 秋葉山古墳群、15: 社家宇治山遺跡、16: 中野桜野遺跡、17: 宮山中里遺跡、18: 中依知遺跡(桜樹古墳群)、19: 吾妻坂古墳、20: 愛甲大塚古墳、21: 小金塚古墳、22: 真土大塚山古墳、23: 釜口古墳、24: 三ノ宮・下谷戸遺跡、25: 三ノ宮・下尾崎遺跡、26: 三ノ宮・上栗原遺跡、27: 天神谷戸遺跡、28: 比奈塙中屋敷横穴墓群、29: 桜土手古墳群、30: 国府津三ツ俣遺跡、31: 高田南原遺跡、32: 矢代遺跡、33: 黄金塚古墳、34: 総世寺裏古墳

出典:かながわ考古学財団編「掘り進められた神奈川の遺跡」



大（応）神塚古墳調査概要

・遺跡の名称 大（応）神塚（寒川町 No.8 遺跡）

・調査実施日

- ①平成 30 年 3 月 6 日（火）～3 月 30 日（火）（内 14 日間）後円部調査
- ②平成 31 年 2 月 18 日（月）～3 月 14 日（木）（内 14 日間）墳頂部調査
- ③令和 2 年 2 月 25 日（月）～3 月 30 日（木）（内 11 日間）くびれ部調査
- ④令和 3 年 3 月 3 日（水）～3 月 31 日（水）（内 15 日間）前方部調査
- ⑤令和 4 年 2 月 22 日（火）～3 月 30 日（水）（内 20 日間）後円部西側周溝調査
- ⑥令和 5 年 2 月 21 日（火）～3 月 29 日（金）（内 14 日間）くびれ部再調査
- ⑦令和 6 年 3 月 4 日（月）～3 月 28 日（木）（内 15 日間）前方部西側

・所在地 高座郡寒川町岡田 2385

・調査機関 寒川町教育委員会 教育政策課

・調査担当 小林秀満

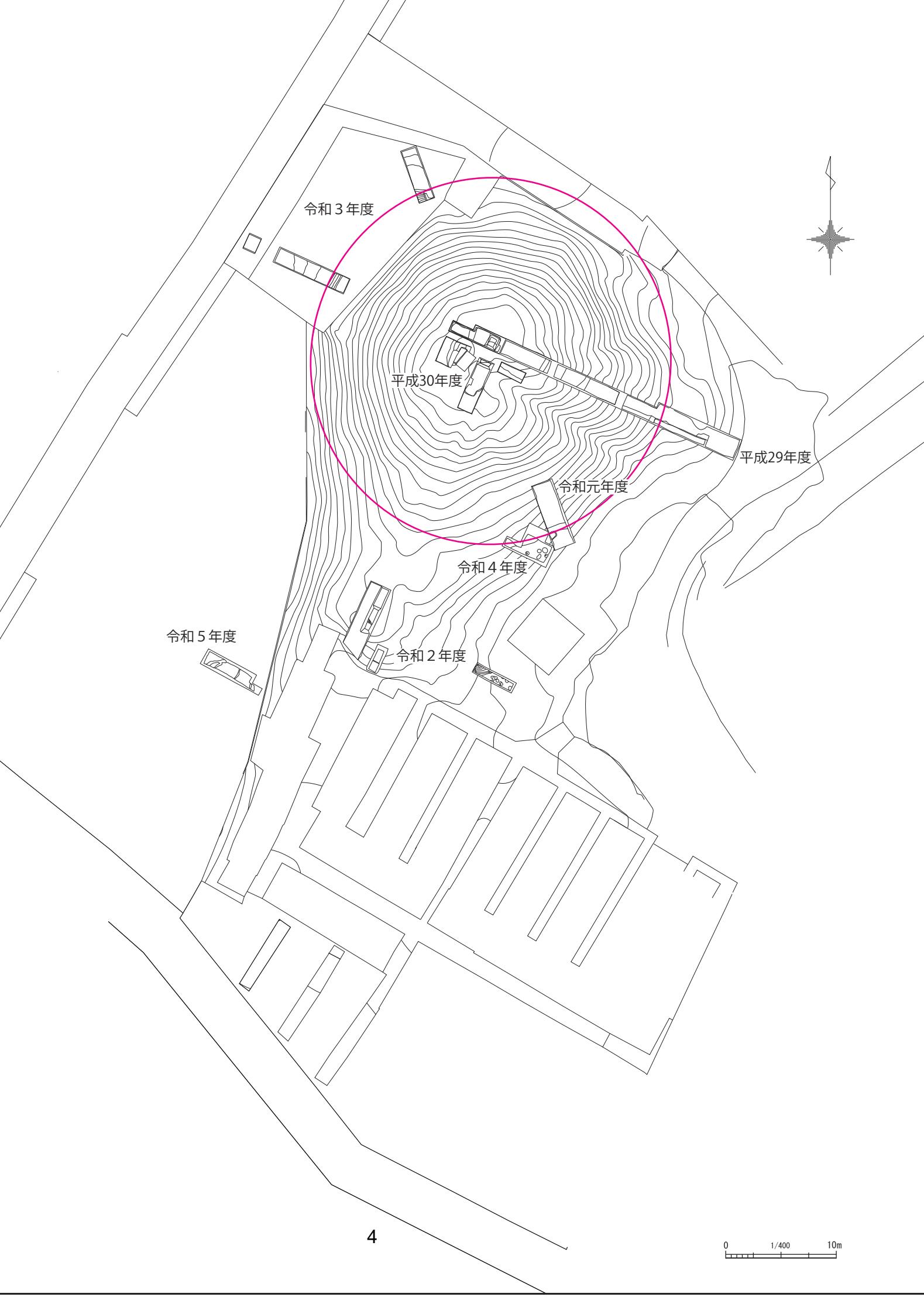
・調査面積 ①45.2 m² ②45 m² ③約 12 m² ④19.5 m² ⑤19.8 m² ⑥9.4 m² ⑦8.2 m²

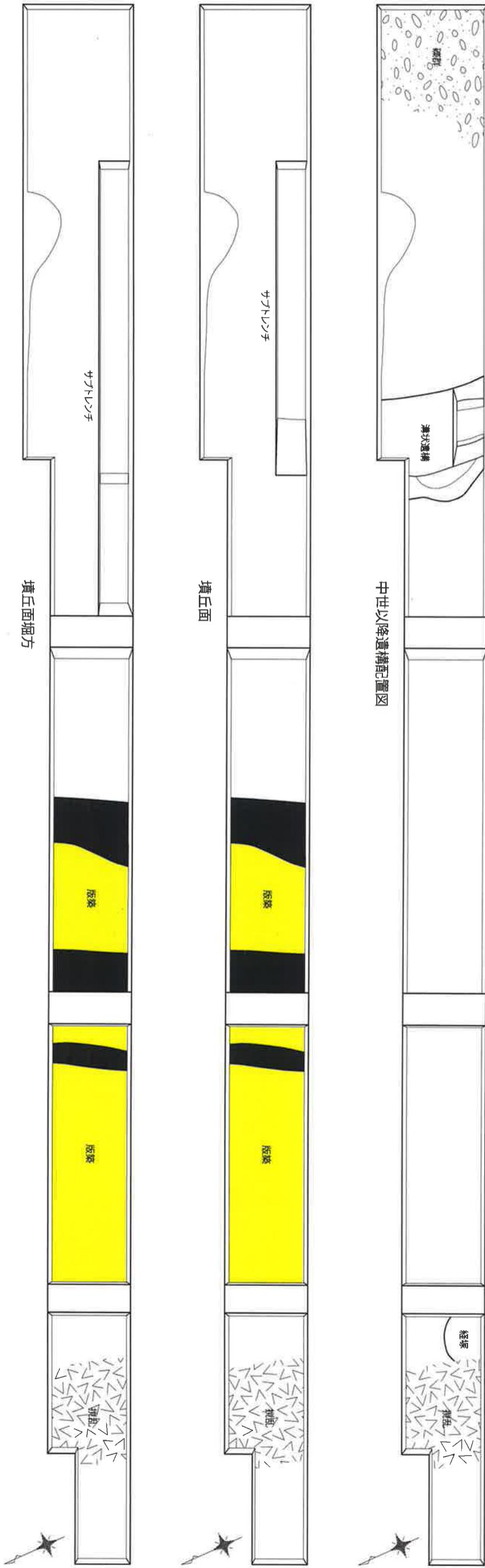
・計 159.1 m²

・調査原因 保存目的

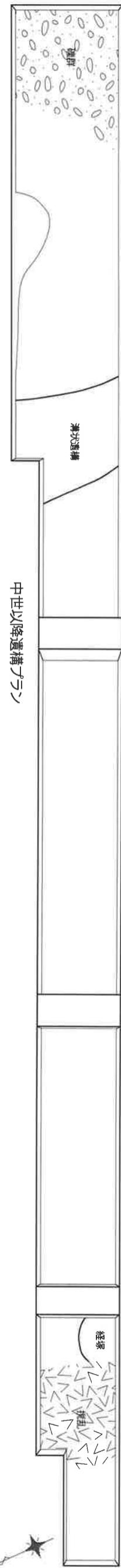
大（応）神塚調査まとめ

- ・墳丘裾が判明、後円部は直径 30m ほどと推定される。
- ・周溝は無いタイプの可能性も（底面がフラットではない）
- ・墳丘については裾に近い部分は地山をローム層近くまで掘削し土台を構築、その後黒色土を盛土している様子である。墳頂部はローム層にて構築されており、その間は一部黒色土とローム層を交互に構築している様相も伺える。
- ・明治期の調査痕が確認された。墳頂部をかなりの規模で調査されていて、遺物も含め主体部はほとんど残存していなかった。
- ・残存部分から、礫榔を持つ粘土榔の木棺墓主体部の可能性。（東海地方の影響か）
- ・残存主体部は版築構造が見られず構築墓壙の可能性も考えられる。
- ・残存前方部は長軸（南側）方向には堀込が見られないので後世に削平された可能性が高い。
- ・前方部西側は近代以降広範囲に掘削された可能性が高い
- ・前方部短軸方向は墳丘裾が判明したのでそこから古墳全体を想定すると全長 60m ほどか（明治期の記述にも 60m とある）
- ・古墳の時期は時期を決定づける土器が出土していないので不確定だが、4 世紀後半との見解がでている。
- ・配石、鏡や安樂寺本尊の年代から中世山岳信仰に利用されていた可能性がある。
- ・宝永火山灰混入溝、後円部裾部の配石等から近世に塚を整備した可能性がある。
- ・明治期以前に盗掘されていた可能性があり。

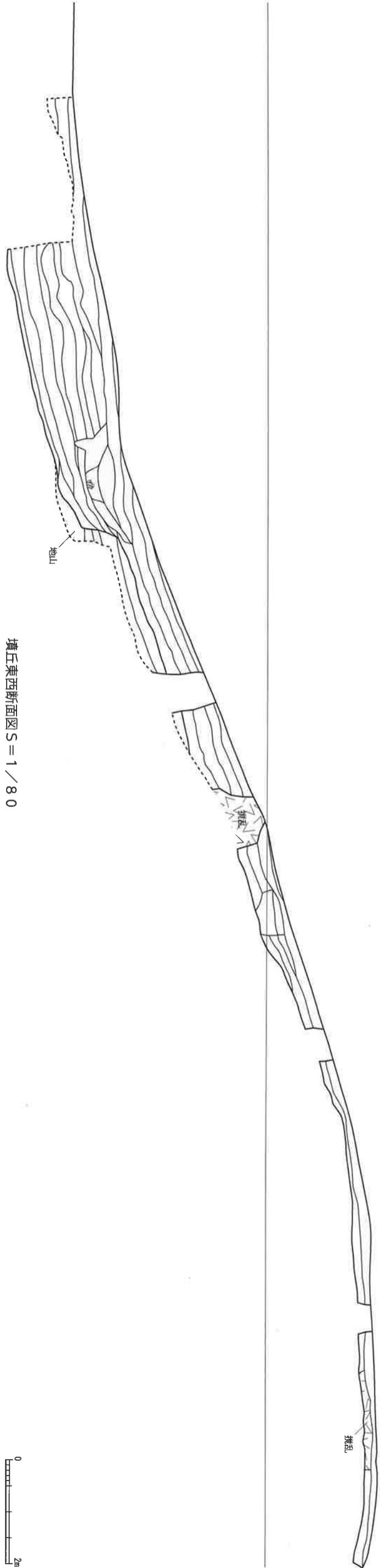




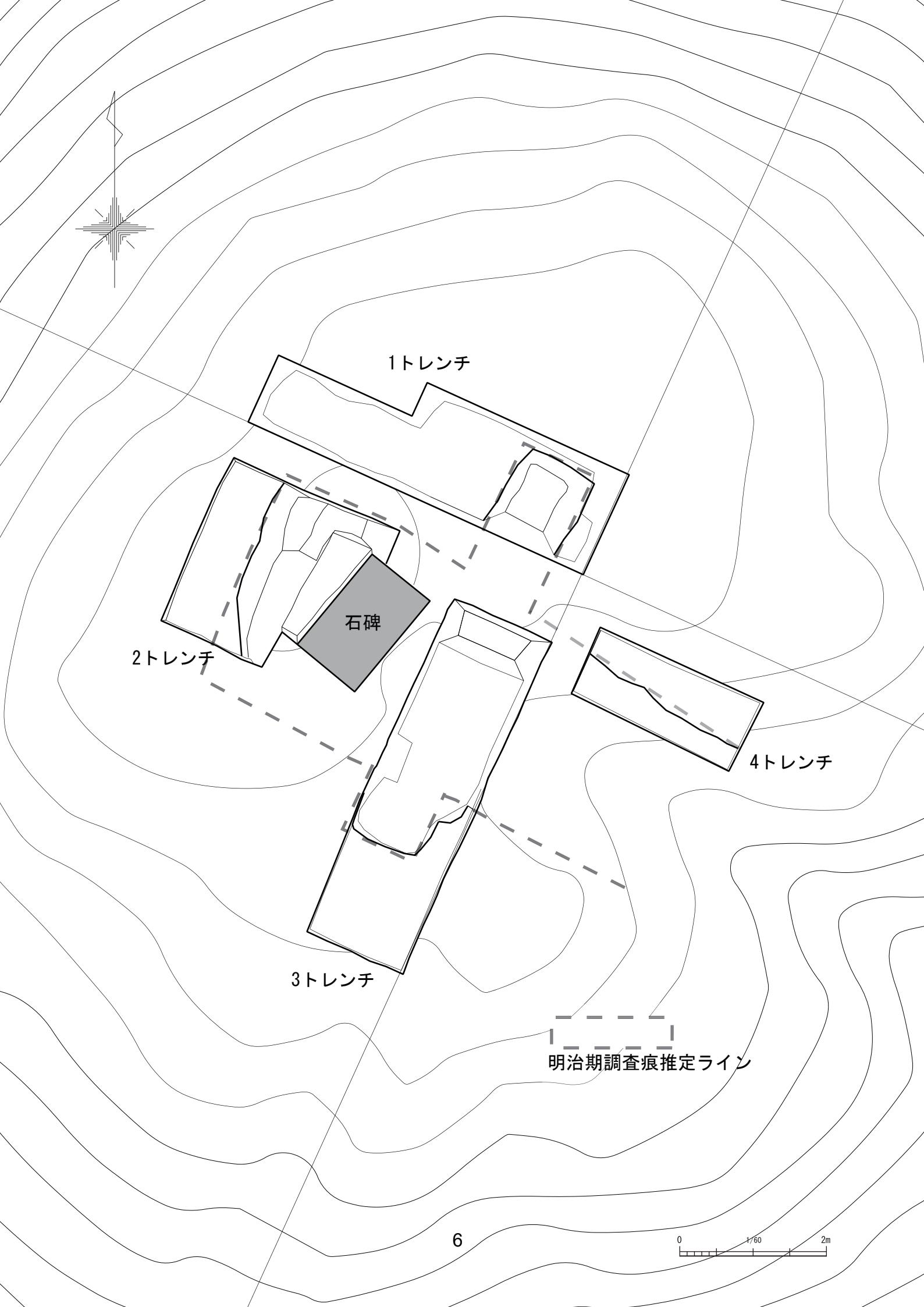
中世以降遺構配置図



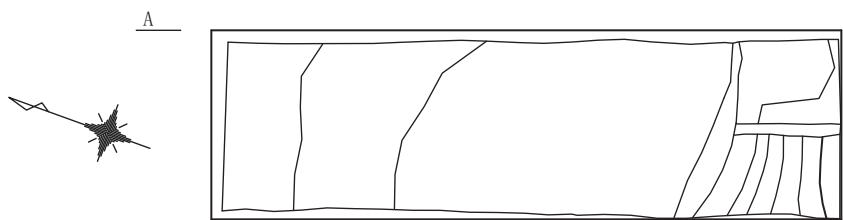
中世以降遺構プラン



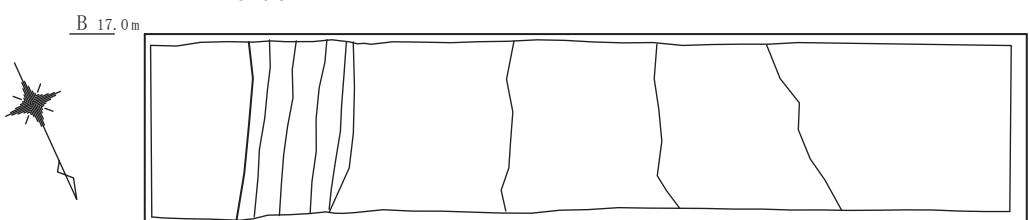
DL(m)=20.00



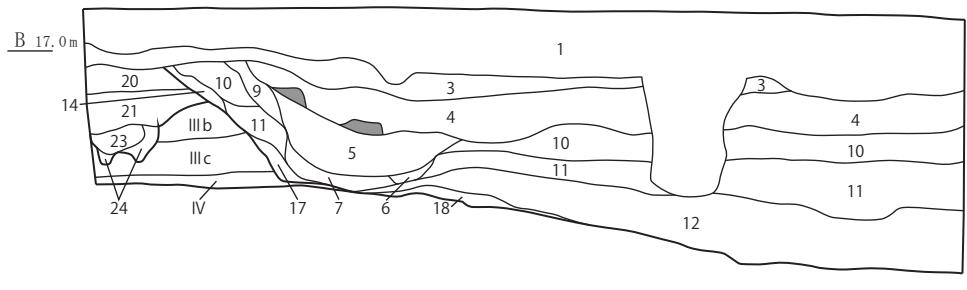
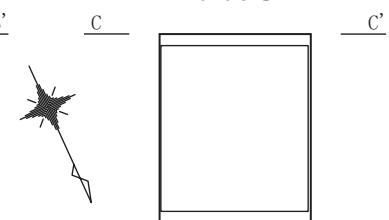
TR 1



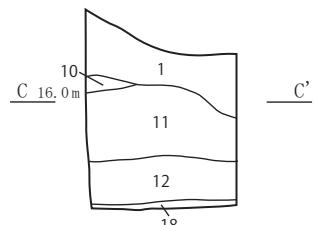
TR 2



TR 3



B'

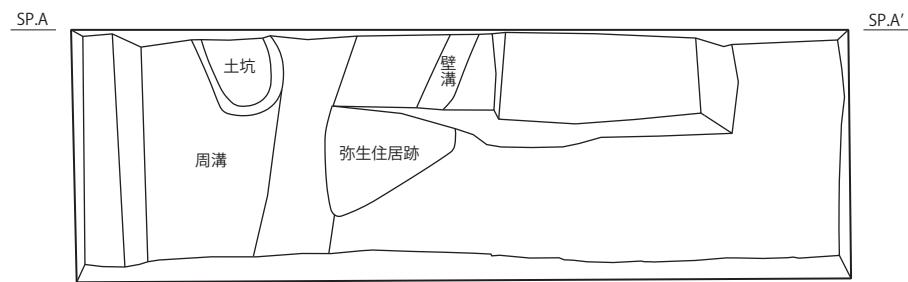
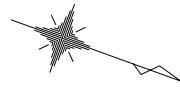


0 1/60 2m

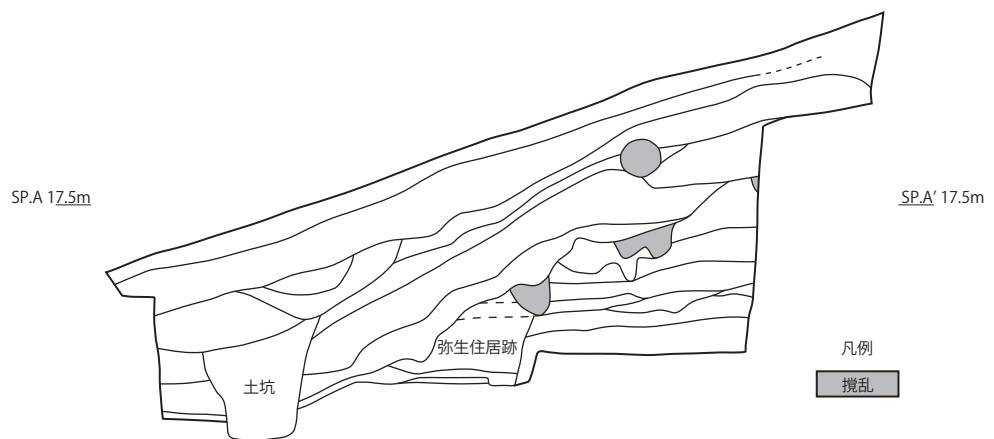
宝永火山灰純層

1. 現代攢乱層
2. 褐色土 (7.5YR3/4) 橙色スコリア粒子を微量含む。粘性・締り共欠ける。
3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子、黒色スコリア粒子を少量含む。粘性有り、締り弱い。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性・締り共欠ける。最下部に宝永火山灰の純層を観察する。
5. 褐色土 (7.5YR3/4) 橙色スコリア粒子を多量、黒色スコリア粒子を少量含む。粘性弱く、締り強い。
6. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を多量、黒色スコリア粒子を少量、黄色スコリア粒子を微量含む。粘性弱く、締り有り。
7. 褐色土 (7.5YR3/4) 橙色スコリア粒子を多量、黄色スコリア粒子を微量含む。粘性弱く、締り強い。
8. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を少量含む。粘性有り、締り弱い。
9. 褐色土 (7.5YR3/4) 橙色スコリア粒子を多量、黒色スコリア粒子を少量含む。粘性・締り共弱い。
10. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を少量含む。粘性有り、締り弱い。
11. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を多量、大粒の黒色多孔質スコリア、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性・締り共有り。
12. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 大粒の黒色多孔質スコリア、ローム粒子を多量、橙色スコリア粒子を少量、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性・締り共強い。
13. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を多量、黒色多孔質スコリア、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性弱く、締り強い。
14. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を少量含む。粘性有り、締り弱い。
15. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を少量、黒色多孔質スコリア、橙色スコリア粒、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性弱く・締り強い。
16. 黑褐色土 (7.5YR3/2) 橙色スコリア粒、橙色スコリア粒子を微量含む。粘性強く・締り有り。
17. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を多量含む。粘性・締り共有り。
18. IV層主体 橙色スコリア粒を少量含む。粘性・締り強い。暗褐色土を混入する。
19. 黑色土 (7.5YR2/1) 橙色スコリア粒子を少量含む。粘性・締り共有り。
20. 黑色土 (7.5YR2/1) 橙色スコリア粒子を多量含む。粘性・締り共有り。
21. 黑色土 (7.5YR2/1) 橙色スコリア粒子を多量含む。粘性有り・締り強い。
22. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を多量、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性有り・締り強い。
23. 24層主体 焼土を多量含む。
24. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 橙色スコリア粒子を少量、黒色スコリア粒子を微量含む。粘性・締り共強い。

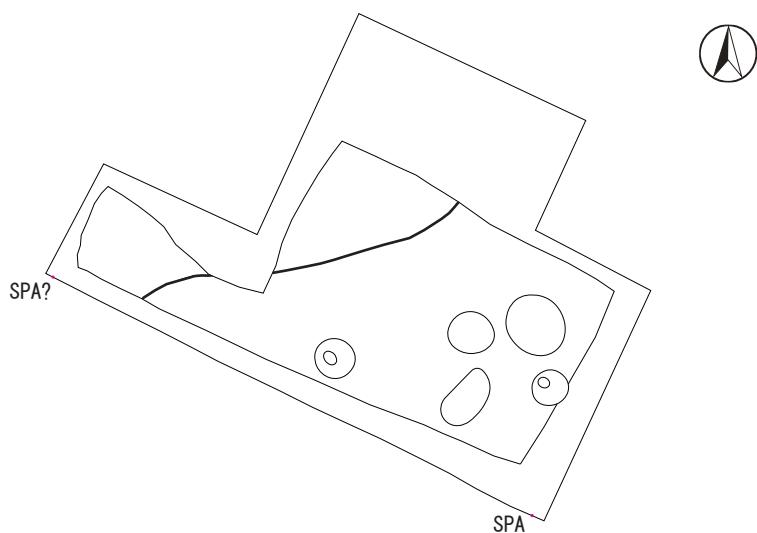
平成 31 年度 TR 1 平面図



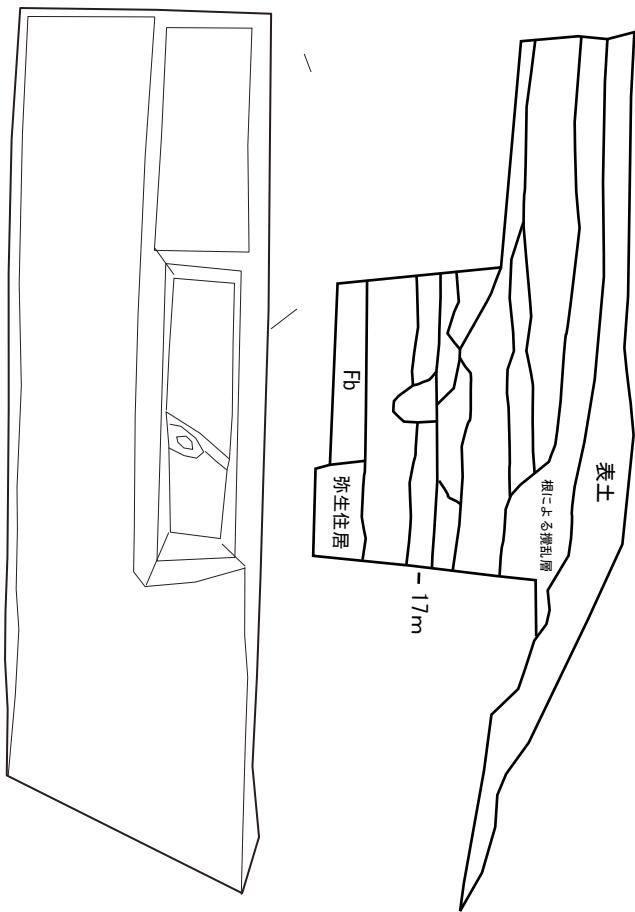
平成 31 年度 TR 1 西壁土層断面図



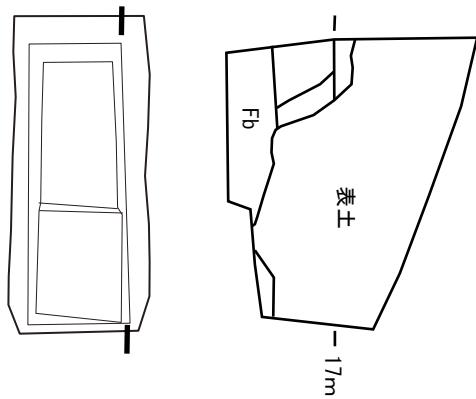
R4くびれ部平面図



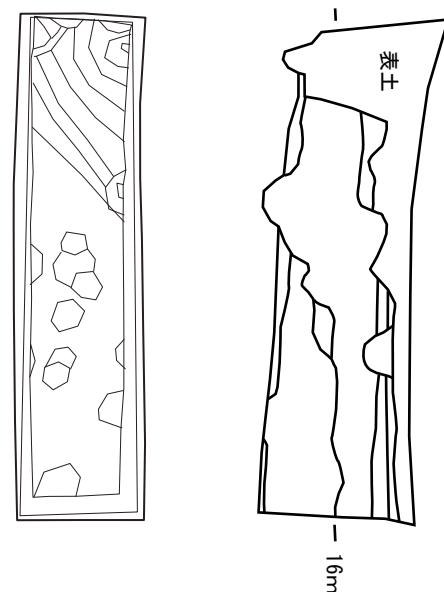
令和2年度1TR平断面図



令和2年度2TR平断面図



令和2年度3TR平断面図



伝承や流布されている説の検証

寒川神社

- ・社伝によれば雄略天皇（5世紀）に奉幣
- ・社伝によれば創祀は727年に社殿創建
- ・文献登場は『続日本後紀』846年に「従五位下」を授けるとある
- ・平安時代の『延喜式』では相模国13社の式内社の1社に格付けされ、唯一の明神大社に列せられた
- ・中世ごろには相模国一宮と仰がれていた

「史話さむかわ」加藤丘之助 概説 抜粋

未開の時代にすでにこの郷土の台地には蝦夷式の土器を持った人類、沖積地帯には彌生式の土器を持った人類が住んでいた跡をのこしている。太古における大和族の住民は多くの困難に直面し、また支障の多い陸上移動を避けて、海を利用したことは明らかであるが、その上陸地点はだいたい河口から、しだいに川に沿ってさかのぼっていったものである。

その証拠として、全国に分布されている主な神社の分布を見ると、山岳崇拜とかその他特殊の理由によるもの以外の古い神社は、大きな川に沿って存在していることがわかる。

相模川に例をとってみると、この町の寒川神社（相模一之宮）、西岸の前島神社（相模四之宮）、さかのぼって有鹿神社、支流小出川に入って宇都母知神社がある。これは大和族が安住したところに、その一族の祖先をまつたもので、言いかえれば古い神社の分布は、民族発展の跡をのこしたものと言えるのである。

さてこの集団の大移動で川口に舟を入れた場合、第一に到着した一団一族は川口に近い最も住み良い土地の肥えたところを選んで定住し、次に到着した一団はさらにさかのぼって定住したと考えるのは当然であって、新入りよりも先入の一族がすでに開拓に手が着いているために、威をふるうのもあたりまえである。相模に太古、師長国造、相武国造、鎌倉別の三大族が威をほしいままにしていたが、師長国造は酒匂川の下流、今の酒匂附近、相武国造は相模川の下流寒川、鎌倉別は今の鎌倉に住みついたということは史家の定説であって、前記の民族の移動方式から言ってもうなづけることである。わが寒川が相武国造のいた地であって、相模文化発祥の地であり、関東文化発祥の地であることは、まことに愉快なことである。 略

日本武尊の御東征は、征伐という武力行使ではなく、国造たちに国の意思を伝え、人心の安定をはかるためのものであった。当国では師長国造を訪われ、つぎに海岸づたいには地勢的に困難があったので酒匂川をさかのぼり、支流四十八瀬川から今の秦野附近を通られ寒川の相武国造を訪れたので、佐賀牟能蓑怒の事件は、ふたつの国造の間の地点でおこったと見るべきである。日本武尊はわが寒川に弟橘姫をともなわって、相武国造を来訪されたのである。

成務天皇の五年九月、弟武彦命を相模の国造に任命された。これはいわゆる官制の国造の初めであるが、これまでの国造（首長）をそのまま任命されたものである。 略

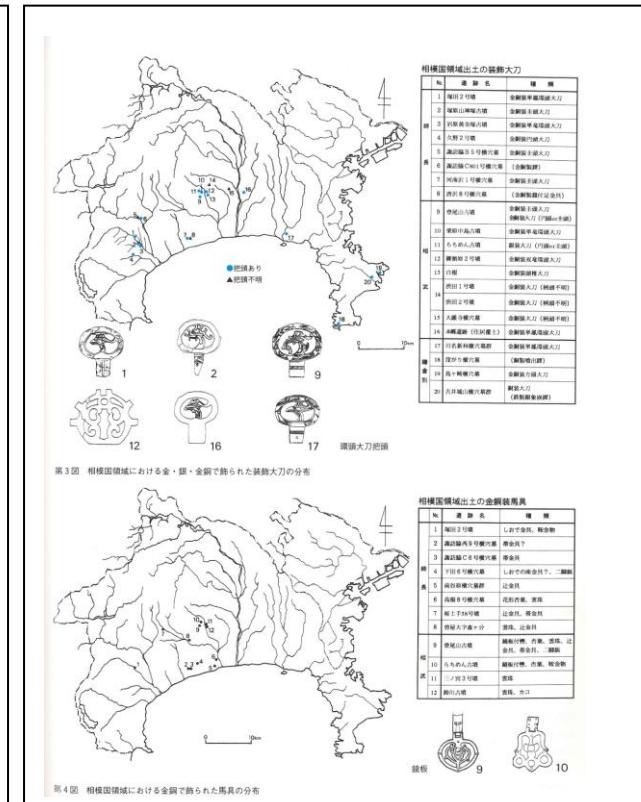
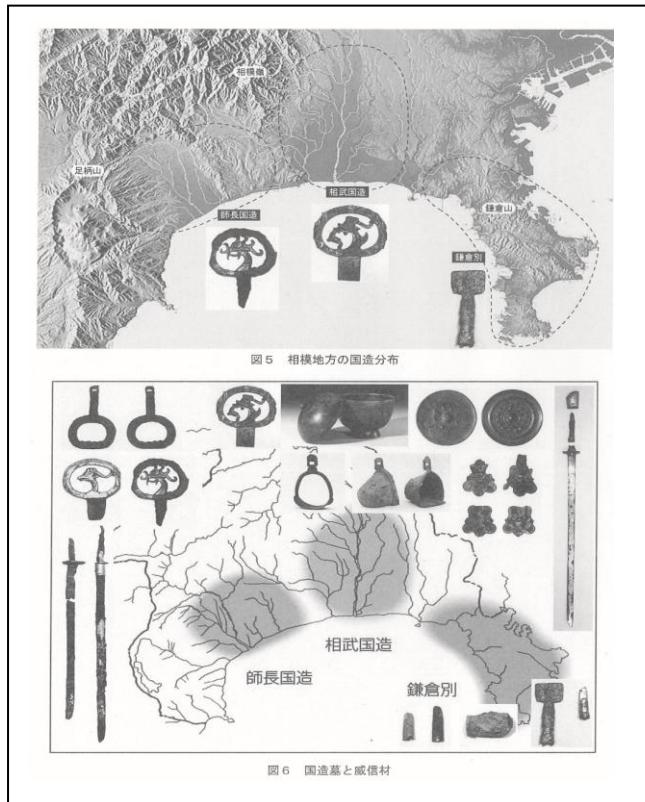
任命された弟武彦命はこれまでの相武国造の子孫であることは言うまでもないしまたこの地寒川に居住されたのである。したがって大神塚および、十三塚（並塚）は弟武彦命を含む代の国造の墓と見るのが妥当である。寒川神社はのちにくわしく述べるが、相武国造一族の氏神である。 略

以上によりこの寒川が相模文化の発祥の地であり、太古における大都であり、国造居住の地であったことが明らかである。またさらにその氏神が寒川神社にまつられ、さらに日本武尊が幾日かを滞在された地であり、近畿から関東、奥羽への交通要地であったことを立証することができる。

国造（くにのみやつこ）について

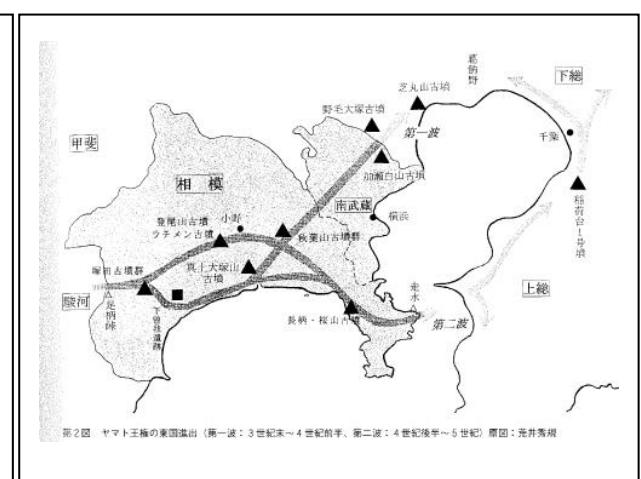
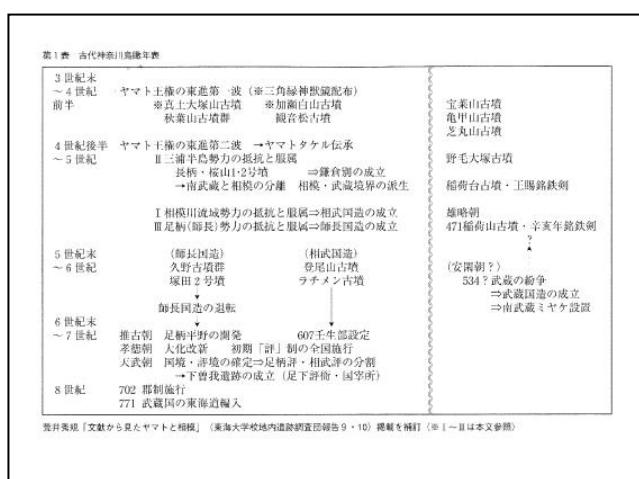
- ・大和王権の行政区分の国の長。この国は律令制前の行政区分
- ・神奈川県は律令制では相模国と武藏国的一部からなる
- ・相模国は、相武国造、師長国造、鎌倉別からなる
- ・国造は西日本で6世紀、東日本は6世紀後半に制定と考えられている

6～7世紀（古墳時代後期～終末期）



「相模地方の国造・在地首長と古墳」田尾誠敏

「相武国の確立」立花実 共に『相武国の古墳』より



「文献による相武国造」荒井秀規 『相武国の古墳』より

寒川神社について

寒川神社の祭神=初代相武国造（さがむのくにのみやつこ）茅武彦命？

- ・現在は寒川比古命、寒川比女命の二柱を寒川大明神として奉称
- ・寒川神社の祭神は近世には変遷があった

江戸時代の寒川神社本殿で現在の倉見神社本殿の扉は三扉であり、三神まつっていたことがうかがえる。一人の英雄を祭っている感じでは無いのでは？

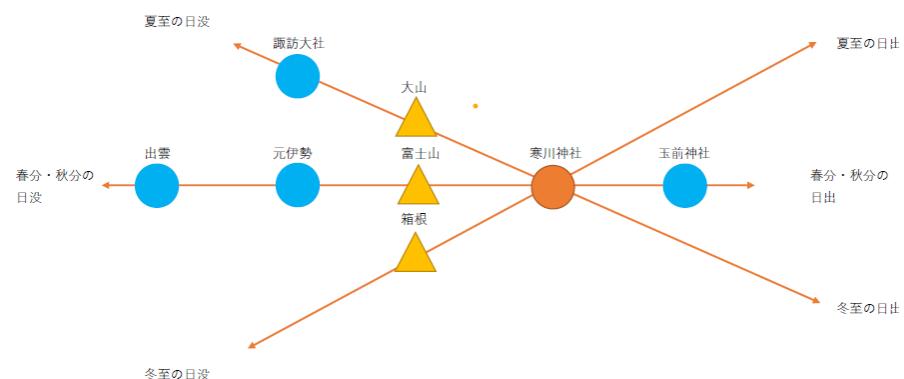
『寒川神社の社名の「サム」を柳田国男は「清い」とか「つめたい」と捉え、寒川を“清らかで神聖な泉や池”と捉えていた』

鎌田東二「寒川神社と相模国の古社の歴史と民俗」『日本の聖地文化』

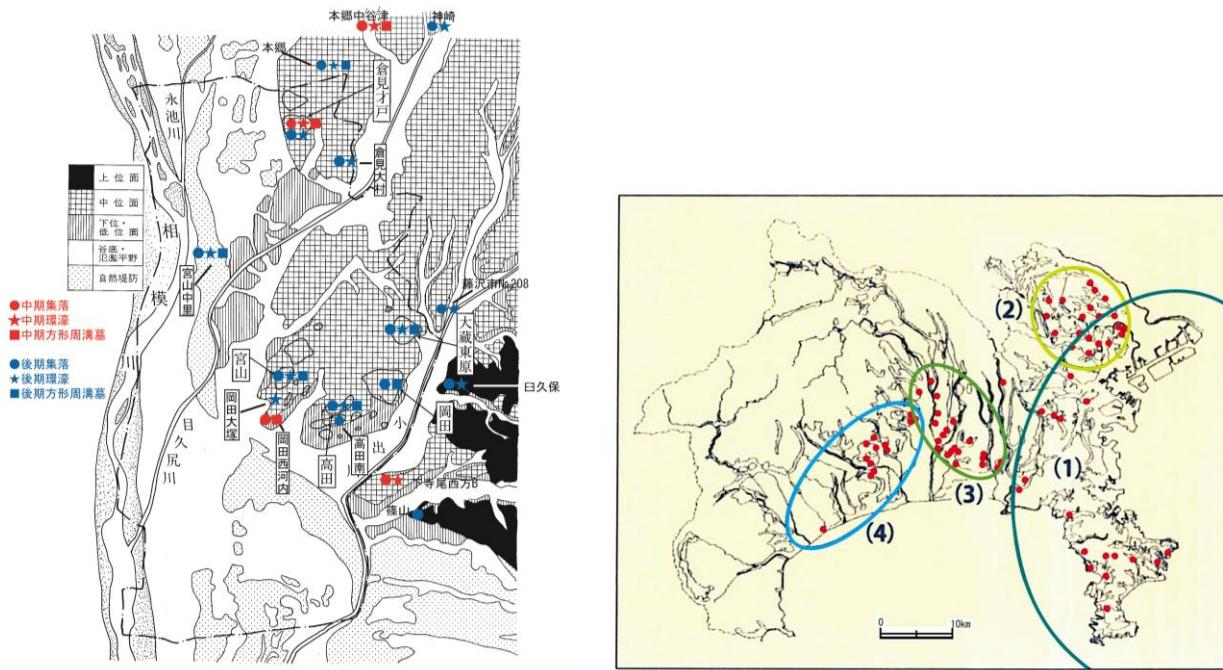
- ・文献登場は『続日本後紀』846年に「従五位下」を授けるとある
- ・平安時代の『延喜式』では相模国13社の式内社の1社に格付けされ、唯一の明神大社に列せられた→壬生直黒成の活躍
中世ごろには相模国一宮と仰がれていた（神郷）
- ・高座郡・大住郡の大領家が壬生直（国造家が世襲）
なぜ壬生にとって寒川神社が相模川流域で格上なのか？
- ・相武国造（伊勢原）、高倉評家壬生氏居宅（海老名）、高座郡衙（茅ヶ崎）、相模国衙（平塚）、相模国分寺（海老名）など政治的に見れば壬生の本拠地はこれらの地域と考えられる
- ・壬生にとって寒川神社は氏神だった？場が良かった？

二至二分の地（寒川町観光協会ホームページより）

寒川神社を中心に、二至二分の日の出、日の入りの方角を結ぶ直線上には、パワースポットが並んでいることがわかります。よって、寒川神社が鎮座する寒川の地からは、春分・秋分の日に富士山、夏至には大山（神奈川県伊勢原市）、冬至に箱根へ沈む夕日を見ることができます。

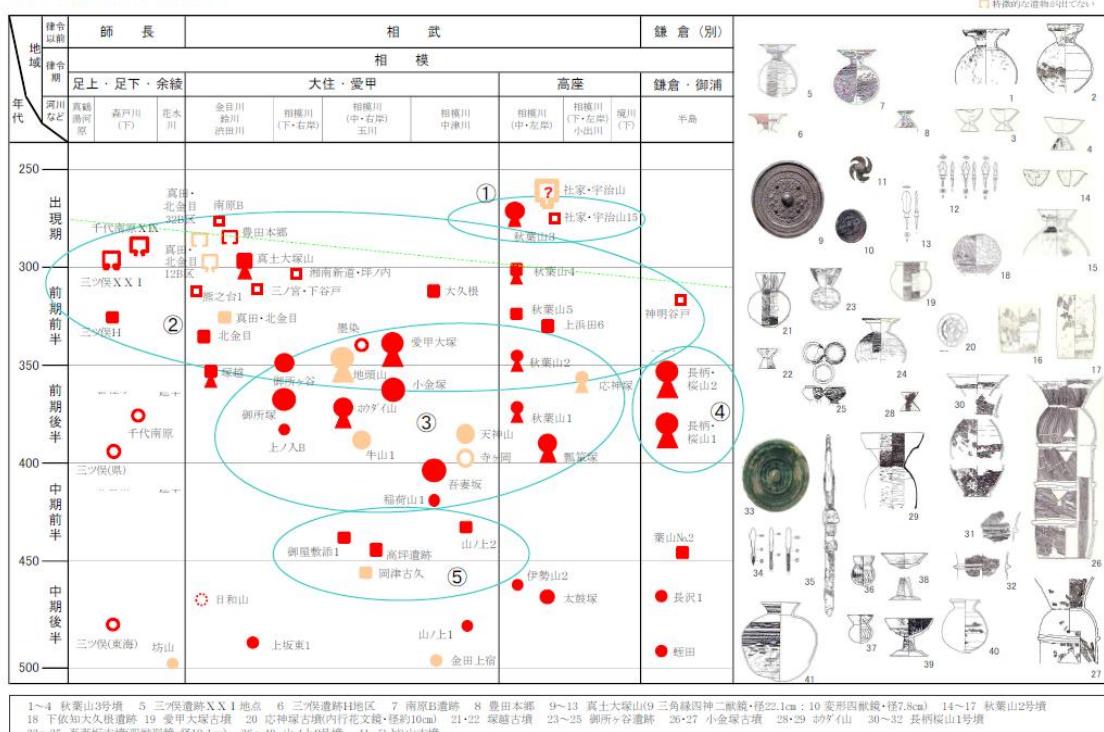


寒川周辺弥生時代遺跡分布図



『掘り進められた神奈川の遺跡』かながわ考古学財団

相模の前期・中期主要古墳編年



『2006 かながわ考古学財団公開セミナー』より

参考文献

- 加藤丘之助 1950 『史話さむかわ』
- 寒川町郷土研究会 1980 『さむかわその昔を語る第二集』
- 寒川町 1996 『寒川町史 8 別編 考古』
- 寒川町 1997 『寒川町史 10 別編 寺院』
- 寒川町 2000 『図録 さむかわ 寒川町史 15 別編』
- かながわ考古学財団 2004 『宮山中里遺跡・宮山台畠遺跡』調査報告170
- かながわ考古学財団 2016 『宮山中里遺跡II』調査報告314
- かながわ考古学財団 2016 『宮山中里遺跡III』調査報告317
- かながわ考古学財団 2018 『宮山中里遺跡IV』調査報告 319
- かながわ考古学財団 2006 『かながわ考古学財団公開セミナー』
- かながわ考古学財団 2010 『掘り進められた神奈川の遺跡』
- かながわ考古学財団 2019 『相模川中流域の古墳時代を考える』
- 埋蔵文化財研究会 1989 『古墳時代前半の古墳出土土器の検討』
- 平塚市博物館 2001 『相武国の古墳』
- 寒川町宮山遺跡発掘調査団 2002 『宮山遺跡発掘調査概報』
- 神奈川県教育委員会 2012 『弥生時代のかながわ』
- 小林克利他 2012 『岡田西河内遺跡』 吾妻考古学研究所
- 鎌田東二他 2012 『日本の聖地文化』
- ディアゴスティーニ 2014 『日本の神社 37 寒川神社』
- ウィッキペディア(web サイト)

資料中引用元無きものは寒川町・寒川町教育委員会資料となります。

今回の講座にあたり次の期間・方々から多大なご協力をいただきました（順不同、敬称略）

神奈川県埋蔵文化財センター (公財) かながわ考古学財団 海老名市教育委員会 海老名市温故館

井関文明 井出智之 押方みはる 柏木善治 小林萌絵 西川修一 北條芳隆